

西鶴の地域意識

—— 浮世草子と地誌をつなぐもの ——

平 林 香 織

(岩手医科大学 教養教育センター 人間科学科 文学分野)

一 はじめに

西鶴の短編集が諸国ばなし形式を基本に編集されていることは定説である。遺稿集も含め二四の浮世草子のうち、一七作品が諸国ばなし形式で書かれている。諸国ばなし形式とは、全国各地に話の舞台を設定し、その土地での短いエピソードを語る短編を集めて編成、一つの作品に仕立てるといえる。ところが、これまで、諸国ばなし形式作品の筆頭である『西鶴諸国ばなし』を含め、それぞれの作品にどのような地域の話がどのように配置されているのかということはほとんど検証されてこなかった。西鶴が諸国ばなしという形式にこだわった理由もわかっていない。なかには諸国ばなし集のかたちをとらない作品もあるが、諸国ばなし形式に代わる編集方針があるのかどうかは明らかではない。そこで、本稿では、諸国ばなし形式が西鶴の創作意識と関わる重要なものであるという仮説を立て、諸国ばなし形式を重視する西鶴の創作意識を西鶴の地域意識と仮定し、西鶴浮世草子における諸国ばなし形式の内実を調査する。ここで使う「地域」という語は「地方」という意味ではなく、「土地の区域」という意味で用いる。西鶴の地域意識を考える上で重要な西鶴晩年の地誌『一目玉鉾』と『西鶴独吟百韵自註絵巻』にも言及

する。

西鶴の三番目の浮世草子作品『西鶴諸国ばなし』(貞享二年・一六八五)の内題には「天下馬」と書かれ、その右肩に「近年諸国咄」とある。内容が諸国の奇談集であることからつけられた副題である。この外題と副題は『一休諸国物語』(寛文年間刊)、『宗祇諸国話』(貞享二年・一六八五)といった仮名草子のタイトルを意識したものといわれている。また、同時代の浅井了意の『東海道名所記』(寛文元年・一六六一)や『浮世物語』(寛文六年・一六六六)が諸国の見聞記というスタイルになっていることの影響もあるだろう。

一言で諸国ばなし形式といっても、すべての作品に共通する法則性はない。作品ごとにいろいろなかたちをとる。

天和二年(一六八二)に刊行された西鶴の浮世草子第一作の『好色一代男』は、巻四までの前半において、世之介が諸国を遍歴して色道修行をする作品である。後半の巻五から巻八までは大尽としての豪遊を描くので、前半の方がより諸国ばなし的である。『好色五人女』(貞享三年・一六八六)所収の中編小説五話は、すべて実際に起こった事件に基づくが、巻一「姿姫路清十郎物語」が室津、巻二「情を入し樽屋物がたり」が大坂、巻三「中段に見る暦屋物語」が京都、巻四「恋草からげし八百

屋物語」が江戸、巻五「恋の山源五兵衛物語」が薩摩と、バランスよく地域性に配慮した編成である。西鶴の浮世草子執筆活動がピークを迎える時期に出版された『懐硯』（貞享四年：一六八七）も、諸国を旅する僧伴山の見聞談を集めたものという設定だから、いろいろな土地の話題が題材となっている。

『好色一代男』の諸国ばなし形式について、少しくわしく述べてみよう。『好色一代男』に収められたひとつひとつの話は、それぞれ独立した小品だが、全五四話をとおして、世之介の誕生から還暦までがたどれるように構成されている。但馬国で出生し、京で育った幼少期を描く冒頭話から還暦を迎えて女護の鳥をめざす最終話までは、確かに一代男の一生を描いた長編小説として読める。短編集的長編小説といえる作品だ。それぞれの話の舞台に注目すると、世之介の移動の説明がないまま、遠く離れた土地でのエピソードが連続する場合がほとんどである。たとえば、巻三の第三章「是非もらひ着物」は、世之介が豊後国中津の「出合宿」で「たはけを尽し」て放蕩し、「此行末何にか、なるべし、二十三の年もかい暮になりぬ」としめくられる話だが、続く第四章「一夜の枕物ぐるひ」の冒頭には、京都で「万懸帳埒明す屋の、世之介と、しかられながら」居留守をつかって掛取りをやり過ぐす世之介が登場する。なぜ、どのようにして豊後の中津から京都に戻ってきたのかという説明はまったくない。そして世之介は遊び仲間誘われるままに鞍馬山参詣に出かけ、その帰り、正月の年籠の行事である「大原の里のざこね」をする。世之介は、ざこねの群衆から抜け出した老女が若い美人であることを見破り、その女を下賀茂に連れ出し一緒に暮らす。次の話「集礼は五匁の外」の冒頭では、直前の話が強く意識され、話の冒頭に、「年籠の夜、大原の里にて、盗みし女に馴初、二十五の六月晦日切に、米櫃は物淋しく、紙帳もやぶれに近き進退、是も置ざりにして」と書かれる。連続する二話において世之介の行動に連続性がない場合と連続性がある場合とが入り混じることで、地域の広がりや動態として俯瞰される。『好色一代男』の

諸国ばなし形式は日本中に神出鬼没する世之介の自由を保障するものである。

ところで、西鶴の浮世草子執筆には空白の時期がある。貞享から元禄にかけて、二作（貞享元年）、三作（貞享二年）、三作（貞享三年）、六作（貞享四年／元禄元年）と浮世草子を書き継いでいるが、元禄二年（一六八九）『本朝桜陰比事』以降元禄五年（二六九二）『世間胸算用』まで丸三年間、浮世草子を刊行していない。そして、その間に、地誌『一目玉鉦』（元禄二年正月）が出版されている。また、元禄四年か五年に俳書『西鶴独吟百韵自註絵巻』（画巻一巻）が成立している。地誌である『一目玉鉦』についてはいうまでもないが、『西鶴独吟百韵自註絵巻』にも西鶴の地域意識が顕著に表われている。この二作品における西鶴の地域意識は、西鶴の浮世草子の諸国ばなし形式の延長線上にある。

二 西鶴浮世草子の地域編成

西鶴浮世草子のすべての話の地域を、①三都（京・大坂・江戸）、②五畿（山城・大和・河内・和泉・摂津）、③七道（東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道）に分類し一覧にした。①は、人口が集中し政治・文化・商業の中心となる「都市」を意味し、②は、京・大坂の市中を除く大坂在住の西鶴が実際に見聞することが可能で、西鶴のもとに情報が集まりやすい地域、③は、話の全国的な広がり、西鶴の地域意識の拡大を暗示するエリアである。江戸は武蔵国であるが、①に入れたので、③からは除いた。調査は、遺稿集も含めた西鶴のすべての浮世草子作品について行った。表は一括して末尾に掲載した。作品ごとの詳細な検討は別稿に譲り、本稿では、大まかに全体を見わたし、いくつかの作品について取り上げることにする。

遺稿集以外の作品について、諸国ばなし形式の作品とそうでないものを含めて改めて整理すると次のようになる。

I 諸国ばなし形式の作品

	作 品 名	刊 行 年 月	西 暦	巻 数 冊 数	話 数	初 版 版 元 * 略 称。表 末 に 正 式 名。
17	西鶴名残の友	元禄二二年四月	一六九九	五卷五冊	17話	(版元不明)
16	万の文反古	元禄九年正月	一六九六	六卷六冊	30話	江戸・万屋 大坂・雁金屋 京・上村
15	西鶴俗つれづれ	元禄八年正月	一六九五	五卷五冊	18話	京・田中 大坂・八尾
14	西鶴織留	元禄七年三月	一六九四	六卷六冊	23話	江戸・万屋 大坂・雁金 京・上村
13	西鶴置土産	元禄六年冬	一六九三	五卷五冊	15話	京・田中 江戸・万屋 大坂・八尾
12	浮世栄花一代男	元禄六年正月	一六九三	四卷四冊	16話	江戸・万屋 大坂・雁金屋 京・松葉屋
11	新可笑記	元禄元年一月	一六八八	五卷五冊	26話	江戸・万屋 大坂・森田
10	好色盛衰記	元禄元年九月	一六八八	五卷五冊	25話	江戸・平野屋 大坂・江戸屋
9	武家義理物語	貞享五年二月	一六八八	六卷六冊	26話	京・山岡 江戸・万屋 大坂・安井
8	日本永代蔵	貞享五年正月	一六八八	六卷六冊	30話	京・金屋 江戸・西村 大坂・森田
7	武道伝来記	貞享四年四月	一六八七	八卷八冊	32話	江戸・万屋 大坂・岡田
6	懷硯	貞享四年三月	一六八七	五卷五冊	25話	(刊記なし)
5	男色大鑑	貞享四年正月	一六八七	八卷十冊	40話	大坂・深江屋 京・山崎屋
4	本朝二十不孝	貞享三年一月	一六八六	五卷五冊	20話	江戸・万屋 大坂・岡田
3	好色五人女	貞享三年二月	一六八六	五卷五冊	25話	江戸・万屋 大坂・森田
2	西鶴諸国はなし	貞享二年正月	一六八五	五卷五冊	35話	大坂・池田屋
1	好色一代男	天和二年正月	一六八二	八卷八冊	44話	江戸・荒砥屋

II 諸国ばなし形式以外の作品

	作 品 名	刊 行 年 月	西 曆	卷 数 冊 数	話 数	初 版 版 元 * 略 称。表 末 に 正 式 名。
1	諸艶大鑑	貞享元年四月	一六八四	八卷八冊	40話	江戸・荒砥屋
2	椀久一世の物語	貞享二年二月	一六八五	五卷五冊	35話	大坂・池田
3	好色一代女	貞享三年六月	一六八六	五卷五冊	20話	大坂・岡田
4	嵐は無常物語	貞享五年三月	一六八八	二卷二冊	7話	京・小島
5	色里三所世帯	貞享五年六月	一六八八	三卷三冊	15話	大坂・深江屋 京・山崎屋
6	本朝桜陰比事	元禄二年三月	一六八七	五卷五冊	25話	(刊記なし)
7	世間胸算用	元禄五年四月	一六八七	八卷八冊	32話	江戸・万屋 大坂・岡田

【江戸】

荒砥屋

万屋 〓 万屋清兵衛

平野屋 〓 平野屋清三郎

西村 〓 西村梅風軒

【大坂】

池田屋 〓 池田屋三郎右衛門

森田 〓 森田庄太郎

岡田 〓 岡田三郎右衛門

深江屋 〓 深江屋太郎兵衛

安井 〓 安井加兵衛

江戸屋 〓 江戸屋莊右衛門

【京】

山崎屋 〓 山崎屋市兵衛

金屋 〓 金屋長兵衛

山岡 〓 山岡市兵衛

松葉屋 〓 松葉屋平左衛門

上村 〓 上村平左衛門

八尾 〓 八尾甚左衛門

田中 〓 田中庄兵衛

小島 〓 小島一右衛門

右の表をみればわかるとおり、諸国ばなし形式の作品は、遺稿集五作を含む一七作品、諸国ばなし形式以外の作品は七作品である。まず、諸国ばなし形式ではない作品について考えてみよう。

三 諸国ばなし形式ではない作品について

諸国ばなし形式ではない作品は、『諸艶大鑑』『枕久一世の物語』『好色一代女』『嵐は無常物語』『色里三所世帯』『本朝桜陰比事』『世間胸算用』の七作品である。

末尾に付した表4の『枕久一世の物語』と表13の『嵐は無常物語』は、それぞれ大坂堺筋の大臣椀屋久兵衛（久右衛門）と京の早雲座の立役嵐三郎四郎の半生を描くモデル小説である。二人とも居住地である大坂と京を離れることなく早逝している。そのため、作品は諸国ばなしという形式とは無縁である。二人は大坂・京というたくさんの人が住み、芸事や遊びを楽しむ場所です活躍した。そして都会生活の軋轢から椀久は精神を病んで水死、嵐三郎は義理死をした。都会の暗部を描いた作品ともいえる。

また、表2『諸艶大鑑』は『好色一代男』の続編として、一代男世之介の息子世伝の大尽生活を描く。舞台は、島原・吉原・新町という三都の遊里にはほぼ限定されている。また、表14『色里三所世帯』は、浮世の外右衛門という男の三都における好色生活を描く作品である。タイトルに「色里三所」とあるから、最初から話の舞台が三都に限定されている。表を見れば一目瞭然だが、上巻の舞台はすべて京、中巻の舞台は大坂、最後の下巻は江戸が舞台になっている。

表6『好色一代女』は、京都で生まれた美しい女が一生の間に職を転々としながら好色生活に身をゆだねて老女となるまでの一生を描く。表のなかで「？」を記した一話を含め、地籍が明らかではない話が多い。どこで手習所を開いたのか、どこで呉服所・武家方で奉公しているのかが書かれていない。あえて場所を明示しなくとも、三都のうちどこかであることは明らかだ。都会で生きる女の一生というところに一代女の眼目がある。

一代女が就いた職業は、女官・舞子養女・大名妾・島原太夫・天神・

十五女郎・端局・寺大黒・女祐筆・呉服屋腰元・大名表使・歌比丘尼・武家方髪結女・介添女・お物師役・仕立女・茶の間女・中居・茶屋女・通女・伝授女・雑女・扇屋妻・糸くり女・隠居の夜伽女・蓮葉女・暗物女・旅籠屋の人待女・紅、針売り女・遣り手・惣嫁・尼の三三にのぼる。当時の女性の職業のほとんどが網羅されている。たくさんの人々が暮らす都市だからこそのいろいろな職業に就くことができたといえる。また、公娼と私娼を合せると色を売る商売が一八種類に及んでいる。宮仕えや武家方への奉公も三都ならではの仕事である。『好色一代女』も、『諸艶大鑑』や『色里三所世帯』と同じように、都会を舞台にした作品なのである。

『本朝桜陰比事』は、中国の裁判説話集『棠陰比事』を意識した題名と内容になっている。そして、京の所司代板倉伊賀守勝重・周防守重宗父子の裁判話を集めた『板倉政要』（寛文年中成立）を念頭に置いているので、舞台はすべて京である。したがって、この話も諸国ばなし形式ではない。

表18『世間胸算用』は、掛買いの支払いに苦勞する人々の年越しのようすを描いた作品である。ところどころ話の舞台が曖昧だが、おおむね、大坂と京の話が半々ずつで、全二〇話中一二話目と最後の話だけが江戸の話になっている。借金の返済の苦勞話という意味で、消費経済が発達した商業都市大坂を中心に、その周辺の大きな消費地という意味で京を舞台にした話を配して作品が構成されている。

このように、諸国ばなし形式ではない作品を一覧してみると、それらはすべて人口の密集する三都ならではの話を集めた作品だといえることがわかる。

では、次に、諸国ばなし形式の作品をいくつか取り上げ解析してみよう。

四 諸国ばなし形式の作品について

まず『西鶴諸国ばなし』(表3)は、諸国ばなし形式で書かれた代表的な作品である。地名とその土地の名物・伝説を列挙する序の全文は次のとおりである。

世間の広き事、国国を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。熊野の奥には、湯の中にひれふる魚有。筑前の国には、ひとつをさし荷ひの大蕪有。豊後の大竹は手桶となり、わかさの国に百余歳のしろびくにのすめり。近江の国堅田に、七尺五寸の大女房も有。丹波に一丈式尺のから鮭の宮あり。松前に百間つづきの荒和布有。阿波の鳴戸に竜女のかげ硯あり。加賀のしら山にゑんまわうの巾着もあり。信濃の寝覚の床に浦島が火うち筥あり。かまくらに頼朝のこづかひ帳有。都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり。是をおもふに人ははげもの、世にないものはなし。

森田雅也が指摘するように、西鶴は、地名と「はなしの種」を「整然とした、明瞭な分類方法」で配列している。地名は、熊野↓筑前↓豊後↓若狭↓近江↓丹波↓松前↓阿波↓加賀↓信濃↓鎌倉↓都と移っていく。畿内の南端熊野にはじまり九州・北陸と周辺部に広げながら、近江、丹波、といった上方のなじみの土地を織りまぜ、再び松前、阿波、加賀といった周辺地域に移り、信濃、鎌倉、都と求心的に都に帰結する。

はじめに長大だったり長命だったりする事物・人物を並べ、次に竜女や閻魔王など架空の存在を配し、小銭を入れる「巾着」や「火うち筥」、そして「こづかひ帳」と金銭に関わるものをならべ、しかも架空の人物を頼朝という実在の人物に切り替え、最後に、実際に居そうな「四十一迄大振袖の女」をもってきて、「是をおもふに人ははげもの、世にないものはなし」と締めくくる。ここまで並べられた各地の長大なものや架空

の人物に比べて、何といっても現実世界にいる人間こそ「ばげもの」であると切り切る。

『西鶴諸国はなし』全体の短編の配置も、表3からわかるように、三都、五畿、七道を舞台にする話が、巻毎に等分にバランス良く配置されている。ちなみに地域ごと巻ごとの話の数は左の表のとおりである。

	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	合計
三都	2話	1話	2話	2話	2話	9話
五畿	3話	5話	2話	4話	2話	16話
七道	2話	2話	3話	1話	3話	11話

どの巻にも三都・五畿・七道の話が必ず入っているし、三都の話よりも周辺畿内の話や、遠隔地の話を多くして、作品全体の地域に対する印象がぐんと広がるように工夫されている。

三都の話がおおむね周期的に配置されて、中心から周縁へという動きが繰り返され、地域的な広がり为上書きされるように工夫されている。

それに対して、表11の『日本永代蔵』はやや様相が異なる。三〇話全体の中、三都を舞台とする話が一二話と多くなっている。ついで七道が一〇話、五畿が九話である。三つの地域がバランスよく配置されているという点では『西鶴諸国はなし』と同じだが、三都の話の数もとても多いという点が『西鶴諸国はなし』とは逆である。その理由は、作品が町人の蓄財に関する話を集めたものだからだろう。経済の中心である消費地の三都により多くの金持ちが居て、成功と没落を繰り返しているという現実に対応している。巻一から巻五に進むにしたがって三都を舞台にした話が減少し、遠隔地の話が徐々に増えており、消費生活が全国に広がっていることを暗示する。

また、没落譚と成功譚という点で考えると、成功譚は巻一に四話、巻二に五話と多いが、没落譚は巻一・巻二にはない。巻三・巻四では各二話ずつと半減し、逆に没落譚は巻三に二話、巻四に一話みられる。さらに巻五・巻六では、成功譚は巻六の第一章だけだが、没落譚は巻五・巻六に各二話、となる。そのどちらでもない随想的な話は、巻三以降、大幅に増える。

総じて成功譚は前半部に多く、後半部は没落譚・随想的章段でほぼ占められ、成功譚はたった一話にまで減少する。都市部の成功者はスケールの大きさという点で目立つから、都市部の話を扱うはじめの方に成功譚が集中する。都会から遠く離れた地域の人びとは経験も情報も不足しがちであるから、成功が長続きしないということがあるのかもしれない。

話の舞台、内容に注目して『日本永代蔵』を見わたすと、巻から巻へ大きな流れを創り、全体にさまざまな話をバランスよく配置していることがわかる。

話の舞台を三都、五畿、七道という三つの地域で分類することは、都市、都市近郊、地方ごとの話のばらつきを検証することでもある。その結果、『西鶴諸国はなし』にしても『日本永代蔵』にしても、かつちりとした規則性ではないが、偏りがなく、段階的に地域が推移するというルールで短編が配置されていることがわかる。

このようなゆるやかに大きな流れを作り作品全体に三都(都市)、畿内(都市近郊)、七道(遠隔地)をバランスよく配置する構成の作品は、ほかに、表8『男色大鑑』(前半)、表12『武家義理物語』、表16『新可笑記』である。

それに対して、都市から遠隔地へというベクトルがはっきりしているのが表7『本朝二十不孝』である。作品全体は、京都にはじまり江戸で終わっているが、巻一と巻二には三都の話が二話ずつあるのに、巻三と巻四には三都が舞台の話はない。五畿の話が巻一に一話、巻二と巻三に二話ずつ、巻四にはない。話の内容は、親を毒殺しようとする子ども

話にはじまり、巻一に極端に不孝な話が集められている。巻五には親孝行な子どもが多く登場する。親不孝から親孝行へという流れと都会から地方へという動きが呼応している。人口の多さや人間関係の複雑さを背景とし、貨幣経済や身分制度の浸透による葛藤と抑圧をはらんでいる点で、都会の方が親子間にもひずみが生じやすいということだろう。

また、伴山という旅僧が登場する表9『懐視』において、冒頭話・京から最終話・江戸へという東海道下りの大きな枠の中で、五畿の話が七話、七道の話が一五話となっているのも特徴的である。五畿の話が作品の中ほどに多く、後半はほとんど遠隔地の話になっていることで、伴山の旅が遠くへ遠くへと進んでいることを暗示している。

同じく表10『武道伝来記』も全一七話のうち三都の話が三話しかなく、五畿を舞台とする話が七話、あとはすべて遠隔地の話である。『武道伝来記』は敵討を題材とした作品である。追手から逃れて、討たれまいと身を隠すものが、より遠方の地へと移動するのに対応した構成である。

反対に大尺たちの老後を描く表15『好色盛衰記』は三都を中心として、五畿を五話、七道を四話だけばらばらと散らした構成になっている。これは、大尺の色遊びが、島原(京)・吉原(江戸)・新町(大坂)の三大遊郭を舞台とすることに呼応したものである。

このように西鶴の編集意識と地域意識は強く結びついたものになっている。西鶴は、都市圏の話、都市近郊の話、遠隔地の話を、作品のテーマに応じたスタイルで配置しながら短編集を構成することによって、ひとつのテーマにさまざまな角度から光をあてている。それは、話の並びが単調になることを防ぐための工夫でもあっただろう。『本朝二十不孝』のように地域ごとの偏りをもたせて話を配置することによって、テーマの変化を暗示するということもあったと思われる。

五 「一目玉鉾」という書名について

さて、西鶴の地域意識を考える際に重要だと思われるのが、地誌『一目玉鉾』（元禄二年）と画巻『西鶴独吟自註絵巻』（元禄三年頃）である。『一目玉鉾』の『西鶴事典』の解説記事を引用する。

本書は、蝦夷千島にはじまり壱岐対馬にいたるまでの旅行案内書。各丁を上下二段に分けて、上段に本文、下段に絵図を付す。上段の記事は、城下町、城主、宿駅、物産、神社、仏閣、名所、古跡、故事、古歌等々を載せる。下段の絵図はパノラマ式の地図になっている。全体を展望する二、道中記の実用性と歌枕の趣味性を融合させた、特異なスタイルの書となっている。なお、各地方の城下に付された城主名は、本書成立に関する情報を伝えている。（中略）

本書に引用される和歌は、基本的に江戸時代に刊行された名所和歌集の類を参考にしたものであるが、通常の書と違い掲出の和歌は少ない。実用的な記事および絵に、簡便な『名所方角抄』等を参照しながら歌枕の趣味性を付したものであり、かつ外国までの距離数までを提示する等、他書にはみえない西鶴らしい趣向がめだつ。

（補元六男記）

岸得蔵や高橋俊彦は、記載内容の誤りも多いことから、本書は旅行記としては不十分であるし、とくに文学性が高いわけではないと指摘している。檜谷昭彦は文体や内容に文学的な要素を読み取っている。市川光彦は本書に取り込まれた道中記等を精査し、「本書の内容は、形象化された部分の集合体ではなしに、単に素材の羅列にすぎ」ず、文学ではなく素材集であるという。

先学の研究によって記事や和歌の情報源はかなり明らかになっていく。その成果をふまえて、本稿では、西鶴の創作活動全体のなかに位置

づけて考えてみよう。

補元が『西鶴事典』で指摘するように、本書の特徴は、城下町を記したときに藩主名を書き入れることと、外国までの距離が書かれている点である。藩主名の記載は、幕藩体制がかたどる日本という国を意識したものであり、外国との距離の記載は、外から日本を俯瞰する意識ではないだろうか。

そのような国家意識は、書名ならびに序文と冒頭及び末尾からも読み取ることができる。

「玉鉾」を『日本国語大辞典』で引くと、原義は「玉で飾った鉾。また、「たま」は美称」であるが、枕詞「たまほこの」から派生して、「道中」「足」「歩み」を意味する語であると書かれている。

「たまほこ」は「あめつち」と並んで『能因歌枕』のはじめに出てくる語でもある。

天地をば、あめつちとふ。

道 たまほこといふ、私、たまつたといふ。異本、たづきといふ、

私、たまともいふ。

夜 ぬばたまといふ、又またまといふ、むまたまといふ、又くらし。

山 あしびきといふ、しなてるやともいふ、そさのをのもことこの、

あしびきの山へいらじと云けるをはじめていひそむ。

日 あかねさすといふ、あかほさすといふ、あからびくといふ、山のはにさすとき、私、いろのなみてる、ひるはあかさすとも。

中島光風「歌枕」原義考証」によれば、「歌枕」の語には、「歌人必携」「詠歌便覧」といった書物を意味する場合と、「歌題、景物（テーマ乃至モチーフ）としての」、もしくは歌題、景物たり得る古歌詞、所名などを意味する場合があるという。したがって、『能因歌枕』は、その書名の「歌枕」は前者の意味であるにしても、その中に出てくる「歌枕」と

しての「道 たまほこといふ」というのは、歌ことばとして「道」をい
うときに「たまほこといふ」という意味である。「能因歌枕」では「あめ
つち」について「たまほこ」が出されている。「あめつち」（天と地）と
いう神界と人界をつなぐ垂直的な広がりという語について、人間の水平
的な移動を意味する「たまほこ」（道）という語が記載されている。「た
まほこ」が歌ことばとして重視されていたことがわかる。
また、「たまほこの」という枕詞について、『歌枕歌ことば辞典』は次
のように説明する。

「道」「里」などに掛かる枕詞。平安時代以降「たまほこの」「た
ま」は美称、「ほこ」については「梓・銚」の意であるとする説が多
い。梓の「身」と同音を含むゆえに「道」に掛かるとする説が唱え
られたが、「身」が乙類音、「道」の「ミ」が甲類音であることから
疑問が残る。その他、「たま」を靈魂のこととし、「梓」を村落の入
り口や別れ道に立てて邪悪の侵入を防ぐ陽石として、上代農耕社会
の習俗との関係を指摘する説などもある。（中略）「道」の縁から
「栞」「手向けの神」「たより」「行く」などの語に接続する事例も派
生した。ただし、「玉銚」という言葉の中に「道」「道中」などの意
が込められている場合には、枕詞ではなく、転じて単独の歌語とし
て使用されたものであるとも考えられる。また、『新古今集』の時代
には「玉銚や」の語型でも用いられた。（杉田昌彦）

「玉銚の」が「道」に掛かるのは、魔除けのために銚をムラの入り口や
別れ道に立てたからという説である。「玉」は「魂」に通じる。「玉銚」
という歌ことばには、道の安全や土地の安心を祈る思いが込められてい
る。

古歌では、「たまほこの道」は、恋人のもとへ通う道だったり、死者が
旅立つ道だったりする。『万葉集』では三六首詠まれる。巻一一の「恋ひ

死なば恋ひも死ねとや玉梓の道行き人の言も告げなく」という人麿の歌
は『拾遺集』にも採られる。恋人が通ってきたくれない道には、恋のメッ
セージを言づける人さえ通らないという嘆きである。定家はこれを本歌
として「たまほこの道行き人のことつても絶えてほどふる五月雨の空」
（『新古今集』巻第三「夏歌」と五月雨のせいでも誰も通わない道の歌と
した。家持は自身の送別の宴で「玉梓の道に出で立ち別れなば見ぬ日さ
まねみ恋しけわかも」（巻第一七）と詠み、きょう別れると会えない日が
多いので恋しくなってしまうと嘆く。「たまほこの道」は人が通う道なの
である。

一三世紀中ごろに成立したとみられる作者未詳の紀行『東関紀行』に
は、梶原景時の墓所を目にしたときの感傷を、西行が讃岐で崇徳院の配
所を尋ねた折になぞらえて記述するくだりがある。

讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて、かの志度という所にてかくれ
させおはしましける御跡を、西行修行のついでに見まゐらせて、「よ
しや君むかしの玉の床とてもかからんのは何にかはせん」と詠め
りけるなど承るに、まして下さまの者のことは申すに及ばねども、
さしあたりて見るには、いと哀れに覚ゆ。

あはれにも空にうかれし玉銚の道の辺にしも名をとどめけり

西行が讃岐の崇徳院の配所を見た折の歌の「玉の床」を、「玉銚の道」
に置き換える。西行は崇徳院の魂に呼びかけるように詠んでいる。『東関
紀行』では、「うし」に「憂し」と「浮く」を掛けて、さらに「玉」に
「魂」を掛け、憂き景時の魂が中空に浮いてさまよっていることに思い
を馳せている。ここでの「玉銚の道」は鎮魂の道である。

「一目玉銚」が出版された頃、西鶴は眼病を患っていたとも、盲目の一
女を亡くしたともいわれている。人生の道のメタファーとしての「玉銚」
の語史を念頭に置かならば、人生における不如意な時期に出された地誌

の名前が「一目玉鉢」であることは、重要な意味を持つ。文学として「一目玉鉢」を読み直す必要があるだろう。

六 『一目玉鉢』序文について

次に序文をみてみよう。

久かたの日本、雲は平治る江東の山風は穩なり。関西の海、今君が代の道すぢ広く、十廻の松、条に音なく、千声丹鳥の舞謳歌。抑成務天皇五年に諸国の境をわかち、それより行基はしを掛、堤を築給ひ、末の世の民までも土の車を引歌にして、東路の名所旧跡を改め、夷が千鳥の干鯉の目も見ぬ事は人にかたるへき種なし。忍ぶ摺の石を燈籠には入がたし。松島・塩釜の煙に眞若は眠の覚もの、白川夜ふねと聞しに、山に有関を越て、武蔵の月の赤ひも、富士の雪のおもしろいも、詠めてこそ。三保崎の雁も、田子の浦の鰹魚も、喰ねばしれぬ。泊泊、宇津の山辺の葛かづらは尋ねずして、十団子を都への伝もかなと思ふも、替る世の中の人心、赤坂に遊女あり、岡崎に長橋有。鈴鹿の鬼も偽りの時雨に近江菅笠、是やこの相坂山の戻り馬も、暮て伏見の川舟、難波の梅の匂ひ風に船路の浦浦島鳥、鳴門の浪風ゆたかに、日の出の浜より西泊の海迄、長旅の枕詞に一目玉鉢と名付、見へわたりたる道しるべぞかし。

「久かたの日本」という語で書き出されるが、「日」にかかる枕詞「久かたの」によって「につほん」ではなく「ひのもと」と読ませている。そして、太平の世を寿ぐ文が続く(傍線部)。これが序文全体の四分の一を占める。その後は「忍ぶ摺の石を燈籠には入がたし」、「塩釜の煙に眞若は眠の覚もの」、「白川夜ふねと聞しに、山に有関を越へ」と伝統的な歌枕である「忍ぶ摺」「塩釜」「白川」に、俗語を取り合わせる。「武蔵の

月」も「富士の雪」も実際に眺めないとその月の色合いや雪景色の趣がわからないと茶化す。「三保崎の雁」「田子の浦の鰹魚」も「喰ねばしれぬ」と記し、景勝と結びつける景物を食べ物にあらしい、見なければわからない景色、食べなければわからない味、と前文と対句仕立てにする。

続いて、『伊勢物語』の東下りの段の宇津の山で昔男が京の知人に会って喜び、都への言付けをするという故事を下敷きに、名物の十団子を「ことづて」ではなく「つて」にして食べたい、と転じる。雅語を俗語に転換する記述を重ね、それを「替る世の中の人心」と人々の心の変化として受けとめる。「世の人ごころ」というのは西鶴の常套句である。「人心」という語によって乾いた笑いが重ねられた行文が一変する。

「人心」ということは彼は彼が描いてきたさまざまな話の世界への扉を開くものだ。

次の「赤坂に遊女あり、岡崎に長橋有、鈴鹿の鬼も偽りの時雨に近江菅笠」というくだりは、赤坂、岡崎、鈴鹿、近江という地名を並べながら(波線部)、「遊女」「長橋」「鬼」「偽りの時雨」「笠」ということばが、「会う」「遣う」と掛詞の「近江」と響き合い情話の心象風景のようになっていく。いとしい遊女に、長い橋をわたるように思い切つて勇気を出して会いに行く、いろいろな障害をもつともしない(鬼も偽り)が、堂々とはなく顔を隠してこっそりと(菅笠)を被つて)会いに行く、そんな男の風情である。

読者に具体的な人物を連想させるような書きぶりである。『好色一代男』の主人公世之介はそんな男のひとりだ。『好色一代男』巻二の第五章「旅のできごころ」で、世の介は江戸での修業を命じられ東下りをする。その途中、世之介は「鈴鹿の坂野下の大竹屋」で遊女遊びをし、さらに「赤坂御油の戯女」であるわかさ・若松という姉妹になじむ。須磨に松風・村雨という姉妹の海女を置いて都に帰った行平に自分をなぞらえつつ、しかし行平とは違つてわかさ・若松を連れて都に戻ろうとする。し

かし、困窮して結局二人を捨ててしまう。その後江戸に出て出家するがすぐに還俗し（巻二の第六章「出家にならねばならず」、吉野に嶺入りする山伏の一行に加わる（巻二の第七章「うら屋もすみ所」）。吉野山中に向かう世の介は、「岡崎（岡崎）の長橋（長橋）わたりて、すぎし年、若狭、わか松と住ける昔しをおもひ出」す。『好色一代男』は一章ごとに世之介が年を取る設定になっているので、巻二の第七章で思い出している巻二の第五章は二年前の話である。ここではめづらしく世之介が過去を振り返っていることになる。続いて、「檜笠をかたづけ、旅の日数の今は、後鬼前鬼の峰おそろしく、今までの懺悔物語」と書かれる。「檜笠をかたづけ」というのは旅する姿を描写したものが、女たちを捨てたことへのうしろめたさの表れで、そのあとの「懺悔物語」ということはつながっていく。吉野山中のようすが「後鬼前鬼の峰おそろしく」と書かれるのも、罪悪感をもたらす恐怖心の心象風景である。

ちなみに、東下りの話の前話は、世之介が春日の里で「近江」という名の遊女と親しくなる話である（巻二の第四章「誓紙のうるし判」）。したがって、この序文で波線を引いた部分は、『好色一代男』巻二の第五章と第七章で使われたことばとびつたりと重なり合うものになっている。序文に戻ろう。

続く「是やこの相坂山」「戻り馬」も、恋人や遊女の元へ行きつ戻りつする男の姿を彷彿とさせる。「暮て伏見の川舟」の「伏見」には、日が暮れて床に「伏す身」が掛けられていて、川舟遊びを連想させる。「難波の梅の匂ひ風」という表現も、夜の香を鑑賞する梅の花のイメージとあいまって妖艶な趣を呈している。

ところがこのようなどちらかという俗な恋のイメージが、「船路の浦浦島島」という量詞によって一転する。竜宮城へ行った浦島の子の物語は、日常と非日常の時空を超えたダイナミックな話である。そんな物語を連想させつつ、あたかも渦巻く「鳴門の浪」が異次元移動の装置であるかのごとく、場面が男と女の息詰まる空間から、雄大な大海原に転換

する。「暮て伏見」と「日の出の浜」が呼応して、夜明けが訪れる。朝日に照らされて「見へわたる道しるべ」であると、本書の『一目玉銚』という名前の由来が書かれる。

同時に「日の出」という語は、「ひさかたの日本」という冒頭の語に輪廻する。日の光が、日いづる日の本の地に昇る。太陽が、その土地に生きる人々、その土地を訪れる人々、行く人と帰る人、出会いと別れを照らし出す。この序文は、大きな広がりの中に繊細な人ごころをのぞかせる文章になっている。前の章で検討した『西鶴諸国はなし』の序文に比べて、同じように地名と名物がならぶ文章でありながら、スケールの大きな印象を与える。『西鶴諸国はなし』序文の地名は「筑前の国」「豊後」など国名を中心としているが、『一目玉銚』は歌枕ばかりである。より限定した区域の地名が並んでいることになるが、『西鶴諸国はなし』が、土地と事物・人物をたんと列挙するのに対して、この序文は地名のみこうにそこで生きる人々の姿を映し出す二重性を持つ。ふたつの序文には、奇談集と地誌の序という、作品の性質の違いによるニュアンスの差という以上の隔たりがあるように思う。

七 『一目玉銚』の記事の首尾について

さて、この序文を受けて、本文開巻は「日の本」の記事と歌になっていく。画巻のはじまりには海原に昇る朝日が大きく描かれている。本文は次のとおりである。

東の沖浪しつかに、毎朝くれなるの影ゆたかに、久かた日の本爰也。

○日の出の浜

我国は天照神の末なれば日の本としも云にそ有ける
天津空替らす照す日の本の国静なる御代そかしこき

「日本」という国の全体をまず意識させて、このあと北から南へと地名が列挙されるのだが、冒頭部だけではなく、本書の最後もまた、強く「日本」という国を意識したものになっている。「松浦潟」で「木のまよりひれふる袖を余所に見ていかかはすへき松らさよ姫」小夜更て堀江こく成松浦舟かち音高し身をはやみかも「あい見んと思ふ心は松浦成鏡の神や空にしるらん」の歌が最後に引かれる。以後は、地誌に関する記事もほとんどなく、最南端の対馬まで地名が並ぶ。

特徴的なのは「是より唐土への海上」として次のように書き連ねられる外国との距離である。

○舟入左右番所

松平右衛門佐殿
松平丹後守殿

是より唐国への海上

○高麗迄百四十四里

○南京迄三百五里

○高砂迄五百四十里

○ちやくちう迄五百四十里

*ちやくちう〓中国福建省漳州

○ひよう迄六百四十里

*ひやう〓澎湖島

○河内迄九百里

*河内〓交趾(安南) ばるしなん〓呂宋島の地名

○ろはん迄千八十里

*ろはん〓呂宋の誤り 東京〓トンキン(ハノイ)

○ちやんはん迄千六百六十里

*ちやんはん〓占城(安南の南方にあった国)

○まろふか迄千六百九十里

*まろふか〓マラッカ

○かほうちや迄千七百五十里

*かほうちや〓東蒲塞(カンボジア)。

○しやむ迄式万百五十里

*はんたん〓番旦。ジャワ島の西端。

○咬嗜吧迄千六百拾里

*咬嗜吧〓ジャガタラ。蘭領東印度の首府。

○まかさる迄四千百十里

*まかさる〓セレベス島の要津マカッサル。

○みんでいや迄四千百四十里

*みんでいや〓印度西海岸地方。

○こは迄四千百十里

*こは〓ゴア

○さんろれんば迄五千式百五十里

*さんろれんば〓サンロレンソ。マダガスカル島。

○いすはんや迄一万千七百三十里

○いげれす迄一万式千六百七十五里

○おらんだ迄一万三千式百里

○らうま迄一万三千式百三十里

右は日本道の積り也。

このように中国からローマに至るまでの地名国名が並ぶ。これは国内の地誌としては珍しい記載内容である。「ひのもと」の国として書き始めた西鶴の筆が、最後に世界に及んでいる。世界を考えることは逆に日本を考えることにはかならない。このあと、大村、平戸、壱岐、対馬の地名が列挙され、序文末尾の「日の出」と呼応するように最後は「入日」の記述で結ばれる。

久かたの入日の海まで浪風ゆたかに舟よくわたりて、浦浦島島の名所是に書つつけて、真砂はつきぬ今の御代の広き道の、道を見るためににもなりぬへし。

「浦浦島島」と序文で使われた表現が再び用いられている。「今の御代の広き道」と御代が寿がれているのも序文と響き合っているし、「道を見るためににもなりぬへし」という結びも「見へわたりたる道しるべぞかし」という序文の結びに意識的に対応させたものだろう。

『一目玉鉾』の冒頭と末尾は日本という国を強く意識している。また、『一目玉鉾』は城下町を記述する際に必ず、藩主（城主）の氏と官名を書いている。諸藩の統治者を明記して、それを統轄する日本という国家への賛美で首尾を整えている。地誌ゆえの形式的なポーズともとれるし、そうではなく、日本という国を称揚したものと考えることもできる。

浮世草子空白期といわれる時期に出版された『一目玉鉾』は、地理的な情報の不正確さから地誌としての評価は低い。本文の詳細な検討は別稿に譲るが、西鶴の生涯の創作活動の根底を流れる地域意識という視点で考えるならば、その集大成として再評価すべき作品ではないだろうか。『一目玉鉾』と同じような国家意識に包摂される地域意識は、同時期の作品『西鶴独吟百韵自註絵巻』にも読み取ることができる。

八 『西鶴独吟百韵自註絵巻』について

『西鶴独吟百韵自註絵巻』の成立は、元禄四、五年（一六九一、二）で熊野ゆかりの高位の人物への献上品と推定されている。西鶴は元禄五年正月に『世間胸算用』を刊行し、翌年八月に亡くなっている。この絵巻を本格的にとりあげたのは乾裕幸で、西鶴の考える正風を理解する上で重要な作品であると論じた¹²。また、近年加藤定彦による注釈が行われている。それを参照しつつ、西鶴の地域意識を考える本論では、この百韻

が「日本道に山路つもれば千代の菊」という発句ではじまり、百韻のうち六十句近い句が地名にまつわる句となっていることに注目したい。序文は次のとおりである。

和歌は和国の風俗にして、八雲立御国の神代のむかしより今に長く伝て、世のもてあそひとそなれり。其はしくれ連、俳諧はそもそも俳諧はそもそも勢州山田の住、風月長者荒木田氏守武よりはしめて、山崎一夜庵の法師、今の都の松永氏貞徳、中古の道を広め給へり。其後、難波の梅翁先師、当流の一体、たとへば、富士のけふりを茶釜に仕掛、湖を手たらひに見立、目の覚めたる作意を俳道とせられし。付かたは、梅に鶯、紅葉に鹿、ふるきを以是新しき句作り也。時に俳風、当世のすかたを百韵の一卷、菊はちと世の色酒、ひとつなる口にまかせ侍るに、上戸ならず、下戸ならず、此間をよしと是定めつかふまつりてさしあける、我ひとりの機嫌にしてうたひけるは千秋楽。

難波俳林

松寿軒

西鶴

西鶴は少し前『俳諧のならひ事』（元禄二年・一六八九）で、「俳諧は勢州の山田風月長者荒木田氏守武よりはしめて」と説き起し、和歌には言及せず松永貞徳、西山宗因への流れを説明する。ところがこの序では、あえて和歌の道に言及している。そして「当流の一体」とみずからの談林俳諧を「目の覚めたる俳道」といい、「当世のすかたを百韵の一卷」にすると宣言している。本画巻は「西鶴の俳諧の方向性」を示したものとされる。この序文は、和歌に続く俳諧の道ということを強く意識したものである。遺稿集『西鶴織留』でも、「俳諧といふも、これ歌道の一体なり」（巻三「芸者は人をそしりの種」）と記している。

次に、発句とその注を見てみよう。

日本道に山路つもれば千代の菊

自註に曰、俳諧、当流といへるは、中古のことく言葉をかさらず、心行の付かたを本として、三句目のはなれを第一に吟味をいたせし。此発句の仕立、君か代のひさしきにくらへて、唐土の菊童子か住る山路も、六丁一里の所也。本朝の海道につもれば、長き流れの山水、万民是を汲て、重陽をことふき、千秋楽とそうたひける。

発句の解釈は、日本という国の道々の山路を重ねると千年も咲き続ける菊のように果てしもないものになる、としておく。空間的な広がりとは悠久の時間の流れを重ね、日本と榮耀榮華の無限性を結びつけた壮大なめでたさを持つ句である。

注記にある「心行」については、ひとまず「平坦でおだやかな詞続きのうちに深みをもたせた句風」という水谷隆之の定義にしたがおう。本稿では、この発句が「君が代のひさしき」ことを強く意識した祝言の句になっていることに注目したい。重陽の句なので、献上する相手への挨拶として長寿を寿ぐ発句となっているのは自然なことである。それにしても「日本道に」という字余りの上五は非常に力強い詠みぶりである。「日本道」という語は西鶴の造語とされるが、「日本」という国を「道」、さらにいえば「旅」という概念で捉える大胆な言い方である。西鶴が注記しているように、菊慈童の故事を踏まえて「君が代」「本朝」を讃える句となっている。

脇句も中国に対する日本を意識した句である。以下に、脇句と第三の句及び注記を示す。

鸚鵡も月に馴て人まね

古風なれば、此脇、紅葉のにしき移す今織、なととつかふまつるを、付過たる事を嫌ひて唐鳥のあふむに日本の人の物言を聞

ならはせ、何そといへは何の事もなく付寄けるを、皆人好める世の風義に成ぬ。

役者笠秋の夕に見つくして

第三に芝居の楽屋帰りの気色を付よせける事、前の鸚鵡の鳥も看板に偽りもなく、小芝居の見せ物にして、是しや、木戸番、合点か、今度丹波の国にていけとりし赤鬼といへとも、人かしくく、又、近江の国、しからき山へ落たる神鳴、と太鼓たたけとも、中中、近年、新しき事は作り物とて、一時花にして、見なれたる孔雀、穴熊の力業を幾度も慰みにおかしかりける。俳諧も此心にむかしから付きたりたる事ともに極めて、梅に鶯、松に雪、正風体そよし。

難波堀江の姿の花、四座の舞子、いつれがいやとおもふはひとりもなし。中にも恋の淵、今、其橋をわたるは、柏に巴の定紋、それよそれよ、芸上手目、と沙汰せし鈴木平七か常の風俗、又、つつきてはなし。

情を舟に乗せて、町のうかれ女の魂ひ袖に飛入、諸寺・諸山の貧僧は黒の衣をかさして、我身の上わすれ、釈迦如来のわたくし銀のほしや、十夜の其暁まで同じ枕の色宿にさはきあそひを願ひける。又、古文を懐におさめ顔成坊主、伊勢の神主もお初尾、此君にまいらせんとそおもふ。まして、浮世男の若盛、無分別とも思はれず。万事は夢なれや。主水か傾城の身ぶり、吉三良か物くるひ、かほるお姫さまのうつくしき、兵藏か大原木売、恋のけふりをふくませ、辰之助か踊、半太夫かそら泣、勝弥かことりまはしなる風俗、左馬之介か愁ひ事、毎日の見物になみたこほさせける。殊更、座本に甚兵衛か腕久やつし、幸左衛門か家老職、半四郎か武道の思ひ人、嵐三右衛門かぬめり奴のふり出し、あらひ風にもあてまい様を、といふて手をしめた

る所は恋のはしまりはしまり、はしまり太鼓、鳥おとろかぬ御代にそありける。

脇句は、「唐鳥」の鸚鵡に日本語を真似させるというもので、発句と同じように日本という国家を強く意識する。

第三の注記の後半の役者評判記のような記述は、「ついついサービヌ過剰、自注の範囲を超えてしまったのである」といわれるが、第三の注の長さや話題の広がりには、「浮世草子風」である。そして、第三に地名は詠まれていないが、「芝居」という語をきっかけに、自注部分にはいくつかの地名と人名があげられる。

連歌や俳諧では、表ぶりということがあり発句以外の表の句には名所(地名)を出すのを嫌う。現存する西鶴の連句にも表に名所を詠んだものはない。しかし、西鶴は『俳諧のならひ事』の「本式俳諧の事」で、「表八句の内に名所いたしてくるしからず。前句の移りより付出す事也」といつている。わざわざ明記しているということは、裏を返せば、名所を出さない式目が一般的ということがあったからだろう。また、「句つづきの事」という一項では、「名所は二句つづく物ゆへに其間二句置也」という。名所を出すからには二句続けて詠み、その場所への称揚の思いを表すということだ。本書からは名所を詠むことに積極的な西鶴の姿勢をうかがうことができる。

さて第三の注記と同じように、「着ものたたむやとの舟待」という四句目の注でも、具体的な地名をあげている。

是は田舎人の一連に、伊勢參宮の下向に、都の名所名所見めぐりて、本願寺の仏さまをあり難く拜み、大坂にしはし住吉・天王寺一見して、芝居めつらしく日毎に詠めつくし、我国舟の出るを嬉しく、旅用意のきる物、荷こしらへせし問屋のありさまを付寄せし。

「着るものたたむやとの舟待」という場所を特定しない船旅の句にたいして、注では、「伊勢」「都」「本願寺」「大坂」「住吉」「天王寺」と地名を連鎖し、まるで道中記のような記載になっている。象徴的な句に対して、名所を具体的にあげて、鮮明な情景を浮かび上がらせる。名所を称揚するとともに、名所の風景にことよせた句作りが行われていることを暗示する。

次は、初折の裏の六句目から八句目にかけてである。

宮古の絵馬きのふ見残す

見わたせは、祇園に、平忠盛にとらへられし火ともし大男おそろし。清水に、福祿寿のあたまたに階子をかけて月代を剃所もおかし。又、北野のやしろに、鳥原の花崎といへる太夫とむかし弁慶と双六うたせ置けるも腹抱へさせける。又、ねほれこせんの宮に、四条の川原の女かた、つやの介か猫と首引する所、人の笑ふ事のみ。鬼の琴ひくもありぬべし。

心持医者にも問す髪剃て

都のうち借り座敷して、養生心に叶ひ、医者にたつねては今すこしといふを待かね、一昨日は嵯峨御室の詠めに暮し、きのふは東山など歩行にてまはり、寺社残りなく、心静に、此病人、命ひとつは拾ひ物、是から行末五百八十までの仕合。

高野へあける銀は先待て

万事は是までと病中に覚悟して、日比したしきかたへそれぞれ形見分、程なふ分別替りて皆我物になしける。是、世の常なり。いつれか欲といふ事、捨かたし。ありかたき長老顔にも爰ははなれず。いはんや、民百姓の心入、あさまし

注記部分は土地のエピソードを語るという意味で、地誌のような書き方でもある。

このように、句に地名が用いられている場合はもちろん、そうでない場合も、注で特定の場所をとりあげその土地にまつわる伝説やエピソードを記述する。右のウ六句目「宮古」・八句目「高野」以外に、百韻の中に名所もしくは地名が読み込まれている句を次に掲げる。

- | | | |
|-----|------|---------------|
| 二折表 | 折立 | 跡へもとれ水の音に諏訪の海 |
| | 七句目 | 住替て不破の関やの瓦葺 |
| 二折裏 | 折立 | 恋種や麦も朱雀も野は見よし |
| | 八句目 | 浅草しのふおとこ傾城 |
| 三折表 | 折立 | 那古の浦一商ひの風もみす |
| | 一〇句目 | 廻国に見る芦の屋の里 |
| 三折裏 | 三句目 | 其道を右か伏見と働きける |
| | 四句目 | 朝食過の櫃川の橋 |
| 名残表 | 五句目 | 同じ京の水に替りの水さひて |
| | 一二句目 | 払子をわたす天の橋立 |
| 名残裏 | 二句目 | 細谷川や智恵の水抜 |

また、最後の花前句、花句、挙句は次のように展開する。

自然と広き道の道筋

八雲立御国に花の大社

松は地久の春の海山

「八雲立」は「出雲」にかかる枕詞だし、「大社」というのは出雲大社を指すから、この花句も地名由来の句と考えてよい。百韻のうち一六句に地名が読み込まれている。これは西鶴の他の連句作品に比べても多い。

また、注記に地名が書かれ、その土地の事物や人物にかかわる世態風俗が描かれるものが過半数ある。

名所に関する記述の多い『西鶴独吟百韵自註繪卷』は、浮世草子の諸国ばなし形式と通じ合う西鶴の地域へのこだわりと、日本という国土を道（地名）でつなぐ意識をもった作品なのではないだろうか。同じように日本という国を意識した地誌「一目玉鉾」とも共通する地域意識を読み取ることができる。西鶴の地域意識は、浮世草子をとおして世態人情風俗を捉える物差しとして醸成され、地誌「一目玉鉾」と『西鶴独吟百韵自註繪卷』では、日本という枠組全体のなかで地域を考える道の概念に収斂しているといえる。久保田淳は、名所・歌枕を考えることは、日本の風土と歴史が創出した文学を考えることを意味するとい⁽²⁾。地域意識という観点で、西鶴の浮世草子・俳諧・地誌を同じ組上で再検討する必要があるだろう。大きな問題であるから、今後さらに丁寧に検証しなければならぬ。またそのような地域意識が、一般にいわれているような西鶴の政治批判意識とどのような関わるのかについても検討していきたい。

*西鶴のテキストの引用は、すべて、新編西鶴全集所収の本文に拠った。

【注】

- (1) 拙稿「『懐視』と『東海道名所記』」（『文芸研究』第144集、一九九七・二）で、『懐視』が浅井了意の『東海道名所記』と類似の構成を持っていることを検証したことがある。
- (2) 森田雅也「『西鶴諸国はなし』の余白」（『西鶴浮世草子の展開』二〇〇六・三、和泉書院）。
- (3) 『本朝二十不孝』の話が、不孝話から孝を描く話へと巻を追うことに変化していることについては、以前述べたことがある。『本朝二十不孝』五巻二十話の内的連関『文芸研究』第111集、一九八六・一）、『本朝二十不孝』に描かれた孝』（『日本文芸論叢』第5

- 号、一九八六・三二。
- (4) 谷脇理史他編『西鶴事典』(一九九六・一二、おうふう)。
- (5) 岸得蔵は、「見る者の心をさそっても実際にはあまり役立ぬ観光パンフレット、『一目玉鉾』はおよそその程度の書にすぎないと思われる」(「細見『一目玉鉾』——旅日記の問題をめぐって——」(『国語国文』第27巻10号、一九五八・二〇)といひ、高橋俊彦は、「衰弱した精神の、外部からの要請によるやつつけ仕事」(『一目玉鉾』と『東海道名所記』(『西鶴論考』一九七二・六、笠間書院)と断じる。
- (6) 檜谷昭彦「『一目玉鉾』の世界」『西鶴論の周辺』一九八八・七、三弥井書店。
- (7) 市川光彦「『一目玉鉾』と西鶴の旅」(『井原西鶴研究』一九九二・四、右文書院)。
- (8) 『能因歌枕』の引用は、『日本歌学大系』所収の広本に拠った。
- (9) 中島光風「『歌枕』原義考證」(『上世歌学の研究』一九四五・一、筑摩書房)。
- (10) 片桐洋一「歌枕・歌ことば辞典増補版」(一九九九・六、笠間書院)。ただし、引用は、本書をさらに改訂した「日本文学Web図書館」の「辞典ライブラリー」に拠った。
- (11) 『東関紀行』の引用は、新日本古典文学全集所収の本文に拠った。
- (12) 乾裕幸『俳諧師西鶴』(一九七九・六、前田書店)。
- (13) 新編日本古典文学全集雲英末雄他全訳・注『連歌集・俳諧集』(二〇〇一・六)。
- (14) その他「遠き伊勢国みもすそ川の流を三盃くんで、酔のあまり、賤も狂句をはけは、世人阿蘭陀竜などさみして」(『生玉万句』序)「夫世俗夷曲俳諧伊勢の海底しれぬ守武の言の葉を仰は、高き山崎の法師より已来乗興其風流柴舟の数数なれと、早き流れを知るは唯難波津の梅の翁の軽口より、世挙て是を学ふ」(『仙台大矢数』下巻末)などこれまでも西鶴は荒木田守武から俳諧の道を説き起こしていた。

西鶴の地域意識—浮世草子と地誌をつなぐもの—

- (15) 水谷隆之「西鶴晩年の俳諧と浮世草子」(『西鶴と団水の研究』二〇一三・二、和泉書院)。
- (16) 発句に関する注釈として現在次のようなものがある。本稿では④の解釈に従う。
- ① 定本西鶴全集頭注「日本道に山路つもれば」
日本の里程に山道を換算すれば
- ② 前田金五郎『西鶴連句注釈』(二〇〇一・一、勉誠出版)
三十六町一里の日本の里程で山路を計算すれば、六丁一里の中国里程より同じ里数でも六倍の長さになるように、千代までも栄えるシンポルの菊の花は、より永く栄えることだ(と祝って菊酒を飲むな)。
- ③ 吉江久弥『西鶴全句集』(二〇〇八・二、笠間書院)
日本の里程で中国の山路の里程を計算し直してみると、中国では六町を一里とするが、日本では三十六町で一里だから、同じ一里でも中国は日本の六分の一ということになる。だから菊酒を飲んで七百年生き延びたという慈童の住む懸懸山の山中までの距離も相当の長さで、日本の千里(中国では六千里)にもなるだろうし、菊水の菊も、千秋万歳も生き生きと長らえることになるだろう。
- ④ 加藤定彦『連歌集・俳諧集』頭注(新編日本古典文学全集)
「日本道」
日本の街道。西鶴の造語か。上五の字余りの破調も、この期の特徴を示している。俳言は「日本道」。
- 「山路つもれば」
山路の里程が積算されれば。山道を意識した表現。「つもればは」(「仙宮の菊の露はつもりて淵となるといふことのあるなり」(奥義抄)との伝承を踏まえたもの)。
- 「山路つもれば」の「つもれば」を、①③は「あらかじめ見計らって計算する」という意味で解釈するが、④は「重にも積み重なる」の意味で解釈する。

- (17) 前掲注(15)に同じ。
- (18) 前掲注(13)に同じ。
- (19) 「表八句のうち十句目までも不仕事 神祇 尺教 恋 無常又ハ名所も外さし出たる言葉なり」(紹巴『連歌至宝抄』)「おもて八句の内、名所・神祇・釈教・恋・無常出すべからず。連歌には十句めまで嫌_レ之」(徳元『俳諧初学抄』)等。
- (20) 錦仁によると、菅江真澄の地誌『雪の出羽路・平鹿郡一四』「内淵巴」の項の記事は、大半が『西鶴諸国はなし』巻四の「鯉のちらし紋」の紹介で、そこに「村名から西鶴の小説を思い浮かべて楽しむ」教養を提供する地誌の「〈逸脱〉と〈過剰〉」があるという。
 (『なぜ和歌を詠むのか 菅江真澄の旅と地誌』、二〇一一・三、笹間書院)。本絵巻の自註は、逆に、俳諧から地誌への〈逸脱〉と〈過剰〉だといえる。
- (21) 『大坂独吟集』(延宝三年・一六七五)百韻中十一句、「俳諧独吟一日千句」(同上)では、第一から第十まで、それぞれの百韻で十句前後詠まれている。
- (22) 久保田淳「平安・鎌倉時代における二、三の名所について」(『日本学士院紀要』66巻3号、二〇一二・三)。中西進も「文学は地誌だと思いついて、さてその上で文学とは何かを考えた方がよい」(『文学は地誌を越えられるか』『文学界』65巻12号、二〇一一・一二)という。

(受理 平成二十六年十月十日)

表 2

		諸艶大鑑 (貞享元年・1684)		
		三都	五畿	七道
卷 1	1	東山		
	2	鳥原		
	3	鳥原		
	4	吉原・鳥原		
	5	吉原		
卷 2	1	吉原		
	2	新町		
	3	鳥原		
	4	吉原		
	5	大坂・吉田屋		
卷 3	1	鳥原		
	2	吉原		
	3	新町		
	4	鳥原		
	5	大坂・吉田屋		
卷 4	1	吉原		
	2	鳥原		
	3	新町		
	4	吉原		
	5		鳴川・奈良	
卷 5	1	鳥原		
	2	新町		
	3	吉原		
	4			丸山・長崎
	5	四天王寺		
卷 6	1	鳥原吉原新町		
	2		伏見	
	3	新町		
	4	吉原		
	5	鳥原		
卷 7	1	元吉原		仙台
	2	鳥原		
	3	新町		
	4	吉原		
	5		塩町・天王寺・堺	
卷 8	1		大津・柴屋町	
	2	鳥原		
	3	新町		
	4	吉原		松前
	5	難波		

表 1

		好色一代男 (天和 2・1682)		
		三都	五畿	七道
卷 1	1	京	但馬	
	2		山崎	
	3	京・両替町		
	4	京・貴船		
	5		伏見・山崎	
	6		須磨	
	7	八坂		
卷 2	1		初瀬・桜井	
	2	六角堂	石山寺	
	3		岡崎	
	4		春日	
	5			江尻・芋川
	6	江戸		
	7		吉野	
卷 3	1	京	八幡	若狭・小浜
	2			小倉・下関
	3	大坂		中津
	4	鞍馬・大原		
	5			寺泊
	6			酒田
	7			水戸・塩釜
卷 4	1			信濃
	2			筑摩川
	3			寒河江
	4	江戸		
	5	知恩院		
	6	鳥原		
	7		熊野・加太	
卷 5	1	京		
	2		大津	
	3		室津	
	4	宮川町		
	5		堺	
	6			筑前
	7			三軒屋
卷 6	1	鳥原		
	2	新町		
	3	四条河原		
	4	新町		
	5	鳥原		
	6	吉原		
	7	新町		
卷 7	1	鳥原		
	2	鳥原		
	3	新町		
	4	吉原		
	5			庄内
	6	新町		
	7	新町		
卷 8	1		石清水	
	2	吉原		
	3	鳥原		
	4			長崎
	5	東山		女護の島

表 5

好色五人女 (貞享3・1686)				
		三都	五畿	七道
卷1	1		室津	
	2		室津	
	3		室津	
	4		飾磨津	
	5		室津	
卷2	1	大坂		
	2	大坂		
	3		伊勢	
	4	大坂		
	5	大坂		
卷3	1	京		
	2	京		
	3		石山寺	
	4		丹波越え	
	5	京	丹後	
卷4	1	江戸		
	2	江戸		
	3	江戸		
	4	江戸		
	5	江戸		
卷5	1			鹿児島
	2		高野山	
	3			鹿児島
	4			鹿児島
	5			鹿児島

表 6

好色一代女 (貞享3・1686)				
		三都	五畿	七道
卷1	1	京・嵯峨		
	2	京		
	3	江戸		
	4	京・鳥原		
卷2	1	京・鳥原		
	2	大坂・鳥原		
	3	大坂・寺		
	4	京		
卷3	1	京		
	2	江戸		
	3	大坂		
	4	? 武家方		
卷4	1	大坂横堀		
	2	江戸		
	3	新橋・仲居		
	4	石垣町		
卷5	1	大坂上町		
	2	伊勢古市		
	3	京・玉造		
	4	京・大雲寺		

表 3

西鶴諸国はなし (貞享2・1685)				
		三都	五畿	七道
卷1	1		奈良	
	2	京		
	3	江戸		
	4			豊後
	5		伏見	
	6			箱根
	7		姫路	
卷2	1		摂津	
	2			紀州
	3		奈良	若狭
	4		生駒	
	5	京・北野		
	6		飛騨	
	7		信濃	
卷3	1			府中
	2	京		
	3	大坂		
	4			筑前
	5			信濃
	6		吉野	
	7		但馬	
卷4	1	大坂		
	2	江戸		
	3		高野山	
	4			常陸・鹿島
	5		堺	
	6		山城・鳥羽	
	7		河内	
卷5	1		奈良	
	2	江戸		
	3			鎌倉
	4			越後
	5			南部
	6		河内	
	7	難波・江戸		

表 4

椀久一世の物語 (貞享2・1685)				
		三都	五畿	七道
卷上	1		大津	
	2	新町		
	3	新町		
	4	道頓堀・九軒町		
	5	淀川屋形船		
	6	難波橋	高野山・堺	
	7	新町		
卷下	1	大坂・江戸		
	2	大坂	伏見	
	3	九軒町		
	4	塩町		
	5	日本橋	住吉	
	6	大坂		

表 8

		男色大鑑 (貞享4・1687)		
		三都	五畿	七道
卷1	1	江戸		
	2	京		
	3	江戸		大隅・会津
	4			
	5			薩摩 筑後
卷2	1			
	2		明石	
	3		奈良	
	4	江戸		仙台・津軽
	5	江戸		
卷3	1		近江	鎌倉
	2			伊賀
	3		高野山	府中
	4	江戸		
	5	江戸		出雲
卷4	1	京		
	2			金沢
	3		和歌の浦	
	4	江戸		
	5			尾張 天橋立
卷5	1	京		
	2		堺	
	3	京		
	4	江戸	玉手村	
	5	江戸		佐渡
卷6	1	京		
	2	大坂		
	3	江戸		石見
	4	京		
	5	大坂		
卷7	1	京		
	2	大坂		
	3	大坂		
	4		伏見	
	5		堺	
卷8	1	京		
	2	京		
	3	京		備前
	4		河内	
	5	大坂・勝尾寺		

表 7

		本朝二十不孝 (貞享3・1686)		
		三都	五畿	七道
卷1	1	京		
	2		伏見	
	3			加賀
	4	大坂		
卷2	1	京		
	2		熊野	
	3	江戸	鳥羽	伊豆
	4			駿府・府中
卷3	1		吉野	
	2		堺	
	3			宇都宮
	4			鎌倉
卷4	1			宮島・岡山
	2			土佐
	3			敦賀
	4			松前
卷5	1			福岡
	2			長崎
	3			高松
	4	江戸	奈良	

表 9

		懐視 (貞享4・1687)		
		三都	五畿	七道
卷1	1	京		
	2	淀川		越中
	3	江戸		
	4			淡路島
	5			鎌倉
卷2	1			越前
	2		堺	
	3			筑後
	4			府中
	5		和泉	
卷3	1		伊勢山田	
	2		紀三井寺	
	3			大隅
	4		春日の里	
	5			下総
卷4	1			越後
	2			岩見
	3			出雲
	4			筑前
	5			讃岐
卷5	1			日向
	2		大津	
	3		室津	
	4			飛騨
	5	江戸		

表11

日本永代蔵 (貞享5・1688)				
		三都	五畿	七道
卷1	1	江戸	泉州	
	2	京		
	3	大坂		
	4	江戸		
	5		大和	
卷2	1	京		
	2		大津	
	3	江戸		
	4			紀州
	5			坂田
卷3	1	江戸		
	2			豊後
	3		伏見	
	4	大坂		
	5			駿河
卷4	1	京		
	2			筑前
	3	江戸		
	4			越前
	5		堺	
卷5	1			長崎
	2		山崎	
	3		大和	
	4			越前
	5			美作
卷6	1			越前
	2	江戸		
	3		堺	
	4		淀の里	
	5	京		

表10

武道伝来記 (貞享4・1687)				
		三都	五畿	七道
卷1	1		近江	
	2			福島
	3			若松
	4		姫路・吉野	
卷2	1		吉野	広島
	2		摂津	熊本・戸隠
	3			徳島
	4			松前
卷3	1		丹後	庄内
	2			府内
	3			宇和島
	4			津山
卷4	1			駿河・羽黒山
	2	島原		
	3			肥後・美濃
	4		伊勢	
卷5	1	京	大和	
	2			豊岐
	3			佐渡
	4			能登七尾
卷6	1			岡崎
	2		但馬・道明寺	
	3			飛騨
	4			越の国
卷7	1			日向
	2			宮城野・外の浜
	3			鹿見島・阿波
	4			三河・敦賀
卷8	1			福知山・庄内
	2			小田原
	3	江戸		桐原・立野
	4			菅田平・伊賀上野

表14

色里三所世帯 (貞享5・1688)				
		三都	五畿	七道
上巻	1	京・岡崎		
	2	京・岡崎		
	3	京・岡崎		
	4	京・岡崎		
	5	京・岡崎		
中巻	1	大坂・新町		
	2	大坂・新町		
	3	大坂・新町		
	4	大坂・新町		
	5	大坂・新町		
下巻	1	江戸・浅草		
	2	江戸・浅草		
	3	江戸・吉原		
	4	江戸・吉原		
	5	江戸・小塚原		

表12

武家義理物語 (貞享5・1688)				
		三都	五畿	七道
巻1	1			滑川
	2		近江・沢山	
	3	京		
	4		近江	
	5		伊丹	大井川
巻2	1			若松・阿波
	2	大坂		
	3			岐阜
	4		丹後	
巻3	1		伏見	
	2	京		岡山
	3	京		
	4		郡山	備中
	5		近江	
巻4	1		郡山	
	2		和泉	
	3			府中
	4	京		
巻5	1	京		
	2		近江	
	3			讃岐
	4		丹後	
	5			下関
巻6	1		宇治	
	2	京		
	3			加賀・福山
	4	大坂		

表15

好色盛衰記 (元禄元・1688)				
		三都	五畿	七道
巻1	1	京		
	2		奈良	
	3	大坂		
	4	江戸		
	5		堺	
巻2	1		宇治	
	2	江戸		
	3			長崎
	4	大坂		
巻3	1	大坂		
	2	江戸		
	3	京		
	4	大坂		肥後 府中
	5		大津	
巻4	1		堺	
	2	京		
	3	大坂		
	4			宮島
	5	京・江戸		
巻5	1	江戸・京		
	2	大坂		
	3	京		
	4	江戸		
	5	大坂		

表13

嵐は無常物語 (貞享5・1688)				
		三都	五畿	七道
上	1	江戸・京・大坂	道明寺	
	2	京		
	3	京		
下	1	京		
	2	京・鳥原		
	3	京・長命寺通り		
	4	京	高野山	

表17

本朝桜陰比事 (元禄2・1689)				
		三都	五畿	七道
卷1	1		丹波	
	2	京		
	3	京		
	4	京		
	5	京		
	6	京		
	7	京		
卷2	1	京		
	2		近江	
	3	京		
	4	京		
	5	京		
	6	京		
	7	京		
卷3	1	京		
	2	京		
	3	京		
	4	京		
	5	京		
	6	京		
	7	京		
	8	京		
	9	京		
卷4	1	京		
	2	京		
	3	京		
	4	京		
	5	京		
	6	京		
	7	京		
	8	京		
	9	京		
卷5	1	京		
	2	京		
	3	京		
	4	京		
	5	京		
	6	京		
	7	京		
	8	京		
	9	京		

表16

新可笑記 (元禄元・1688)				
		三都	五畿	七道
卷1	1			日向
	2		大和	
	3	京		信州
	4			浅香山
	5	江戸		
卷2	1		飾磨	
	2	京		
	3			関ヶ原
	4			宮城野
	5		近江	
	6			駿河
卷3	1		奈良	
	2			大隈
	3			越後
	4		晚秋	
	5	京		
卷4	1		伊丹	
	2			出雲
	3			石見
	4			下野
	5		伊勢山田	
卷5	1	江戸		
	2		播州	
	3			盛岡
	4			奥州
	5			加賀

表18

世間胸算用 (元禄5・1692)				
		三都	五畿	七道
卷1	1	大坂		
	2	大坂		
	3	大坂		
	4	大坂		
卷2	1	大坂		
	2	大坂?		
	3	京		
	4	京		
卷3	1	京		
	2	大坂?		
	3	江戸		
	4		堺	
卷4	1	京		
	2		奈良	
	3	大坂	伏見	
	4	京		長崎
卷5	1	京?		
	2	大坂?		
	3	京?		
	4	江戸		

表21

		西鶴織留 (元禄7・1693)		
		三都	五畿	七道
卷1	1		津	
	2	大坂		
	3	大坂		
	4		近江八幡	
卷2	1		保津川	
	2	大坂		
	3	京		
	4	京		
	5	江戸		
卷3	1	江戸		
	2	?		
	3	大坂		
	4		伏見	
卷4	1	京		
	2	京		
	3		伊勢 丹後	
卷5	1		伊勢 丹後	
	2	大坂		
	3		伏見	
卷6	1	京		
	2	大坂		
	3	大坂		
	4	京		

表19

		浮世栄花一代男 (元禄6・1693)		
		三都	五畿	七道
卷1	1	江戸		
	2	江戸		
	3	京		
	4	京		
卷2	1	京		
	2	京		
	3	京		
	4		宇治	
卷3	1	大坂		
	2	大坂		
	3	大坂		
	4	大坂		
卷4	1		堺	
	2		堺	
	3		奈良	
	4		伏見	

表22

		西鶴俗つれづれ (元禄8・1695)		
		三都	五畿	七道
卷1	1	京		
	2	江戸		
	3	京		
	4			筑前
卷2	1	大坂		
	2	大坂		
	3			備前
卷3	1		吉野	
	2	京		
	3			越前
	4		奈良	
卷4	1			筑前・阿部川
	2	嵯峨		
	3	京		
	4		吉野	
卷5	1	京		
	2	大坂		
	3	京		

表20

		西鶴置土産 (元禄6・1693)		
		三都	五畿	七道
卷1	1	大坂	堺	
	2	京		
	3	大坂		
卷2	1		堺	
	2	江戸		
	3	大坂		
卷3	1	京都		
	2	江戸		
	3		奈良	
卷4	1	江戸		
	2			長崎
	3	大坂		
卷5	1	大坂		
	2	京		
	3	京		

表24

西鶴名残の友 (元禄 12・1699)				
		三都	五畿	七道
卷1	1		伊勢山田	
	2	大坂		
	3	京		
	4	京		
卷2	1		山崎	
	2	京		
	3		伏見	
	4	京		
卷3	1		河内	鳴門
	2	京		
	3		堺	
	4	江戸・大坂		讃岐 象潟
卷4	5			
	6	京		
	7		吉野	
	1	京		
	2	大坂		
卷5	3	京		
	4	大坂		
	5	大坂		
	1	京		
	2	京		
	3	大坂		
4		摂津・桜塚		
5	大坂			
6		摂津・野田		

表23

万の文反古 (元禄 9・1696)				
		三都	五畿	七道
卷1	1	大坂	播州→	
	2	江戸→		鎌倉
	3	江戸→大坂		
	4	京		
卷2	1	京→大坂		
	2		住吉→	西国?
	3	京→		仙台
卷3	1	京		肥後→
	2		大津→	松前
卷4	3	京→		越路
	1	京→		長崎
	2	江戸→大坂		
卷5	3	京		飛騨→
	1	江戸→	堺	
	2	大坂	大和→	
	3	大坂→大坂		
4	大坂		吉野→	

* 「→」が付いている地名は書簡の発信元